

三加和町文化財調査報告 第12集

# 田中城跡

XII

— 南側監視台の調査概要 —

1997

熊本県玉名郡  
三加和町教育委員会



# 序

昭和61年4月15日に「田中城跡」が県指定を受けたのを機会に始められた調査も昨年でⅡ期10年を終了し、今年度からⅢ期目に入ることになりました。

今年度は、空堀の外側に残る三ヶ所の高台のうち、南監視台と呼ばれ、『辺春・和仁仕寄陣取図』に攻めての前線になる「仕寄」という文字と「やぐら」を思わせるような構築物が描かれている場所に想定される箇所調査を行いました。

その結果、従来、監視台跡と呼ばれていた部分を、完全に独立させるように作られた幅約4mの堀切が見つかり、その外側からは岩盤に掘られた柱穴が確認され、つながりを検討することで一辺約4mの構築物が想定されました。専門調査委員の先生方に、検討していただいたところ、確認された場所から考えても『辺春・和仁仕寄陣取図』に描かれている「やぐら」と思われる物に比定してもよからうとの意見で一致しました。

このことにより、この陣取図の信憑性が、また一段と高まったように思われます。

このように、折り返しとなったⅢ期目も、すばらしい発見で始まりますますます楽しみになったように思われます。今後も、専門調査委員の先生方をはじめ、関係者ならびに地元の方々のご指導・ご協力を得ながら、調査を進めてまいりたいと思いますので、よろしくお願い致します。

平成9年3月

三加和町教育長 今村 憲夫

## 例 言

1. 本書は熊本県玉名郡三加和町が「田中城総合整備計画」の一環として、平成8年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、国庫・県費補助事業として三加和町教育委員会が実施し、黒田裕司がその任にあたった。
3. 遺物及び遺構の実測・製図・写真撮影は黒田が行った。
4. 調査の方法・遺物に関しては、専門調査委員のご教示を得た。
5. 出土遺物は、三加和町教育委員会で保管している。
6. 本書の執筆・編集は黒田が担当した。

# 本文目次

第Ⅰ章 序 説	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査経過	2
第Ⅱ章 調査の成果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 遺構と遺物	8
・Ⅰ 区	8
(1)遺 構	9
①不定形土壌	9
(2)遺 物	9
・Ⅱ 区	9
(1)遺 構	9
①堀 切	9
②やぐら跡	11
(2)遺 物	12
・Ⅲ 区	12
第Ⅲ章 まとめ	13
報告書抄録	14

# 挿 図 目 次

第1図 全体図	4
第2図 遺構配置図	5
第3図 Ⅰ区不定形土壌実測図	8
第4図 Ⅱ区堀切土層断面図	10
第5図 Ⅱ区やぐら跡実測図	11

# 表 目 次

第1表 堀切土層観察表	10
-------------	----

## 写真図版目次

- 図版 1 (1) I区調査前状況(北より) (2) I区遺構検出状況(北より) … 17  
(3) I区遺構発掘状況(東より)
- 図版 2 (1) II区調査前状況(北より) (2) II区遺構検出状況(北より) … 18  
(3) II区遺構発掘状況(北より)
- 図版 3 (1) II区堀切検出状況(南より) (2) II区堀切断面(東より) …… 19
- 図版 4 (1) II区柱穴検出状況(南より) (2) やぐら跡確認状況(南より) … 20
- 図版 5 (1) III区調査前状況(北より) (2) III区試掘状況(北より) …… 21

# 第 I 章 序 説

## 第 1 節 調査に至る経過

昭和61年に主郭部の調査を開始して以来、昨年の伝・弾正屋敷跡の調査までで、20年計画のうちようやく半分が終了したことになる。しかし、田中城跡本体の面積は 80,000㎡を越え、調査面積はようやく 1/10の約 8,000㎡に達したところである。

平成三年度からは、平成元年12月に山口県立文書館で発見された『迎春・和仁仕寄陣取図』を参考にして、城の西側を中心に調査を行なってきたおり、いろいろな遺構が見つまっている。特に昨年度は「弾正屋敷跡」と言い伝えられている部分の調査を行い、掘立柱建物跡や井戸跡などが確認された。この建物跡が、即「弾正屋敷」といえるかどうかについては断定できないが、井戸跡の確認により何等かの生活域であったことは間違いなさそうである。さらに、「布掘り」の跡と思われる溝状遺構も確認された。この遺構は、調査区の中では最も新しい遺構であり、豊臣軍との最後の攻防の際に作られた可能性も考えられ、ここにも防御の堅さが想像できよう。

今年度はこのような経過をふまえ、『迎春・和仁仕寄陣取図』によると城の南側にグラグラと続く丘陵上に「やぐら」を想定できるようなものが描かれているため、この遺構を確認して、この陣取図の信憑性を一段と高めることを目的に調査区を設定した。

## 第 2 節 調査組織

調査主体	三加和町教育委員会
調査責任者	今村 憲夫（三加和町教育長）
調査事務	小山 暁（社会教育課課長） 荒木 和富（社会教育主事）
調査員	黒田 裕司（社会教育課主事）
専門調査員	岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館教授） 大三輪龍彦（鶴見大学文学部教授） 田邊 哲夫（玉名市立歴史博物館館長） 北野 隆（熊本大学工学部教授） 阿蘇品保夫（八代市立博物館館長） 大田 幸博（熊本県文化課文化財整備係長）
発掘作業員	靄 浅代・靄 邦代・靄 サカエ・福原 スミ子・福原 房子
発掘協力者	石井 進（東京大学名誉教授・国立歴史民俗博物館館長）・工藤 敬一

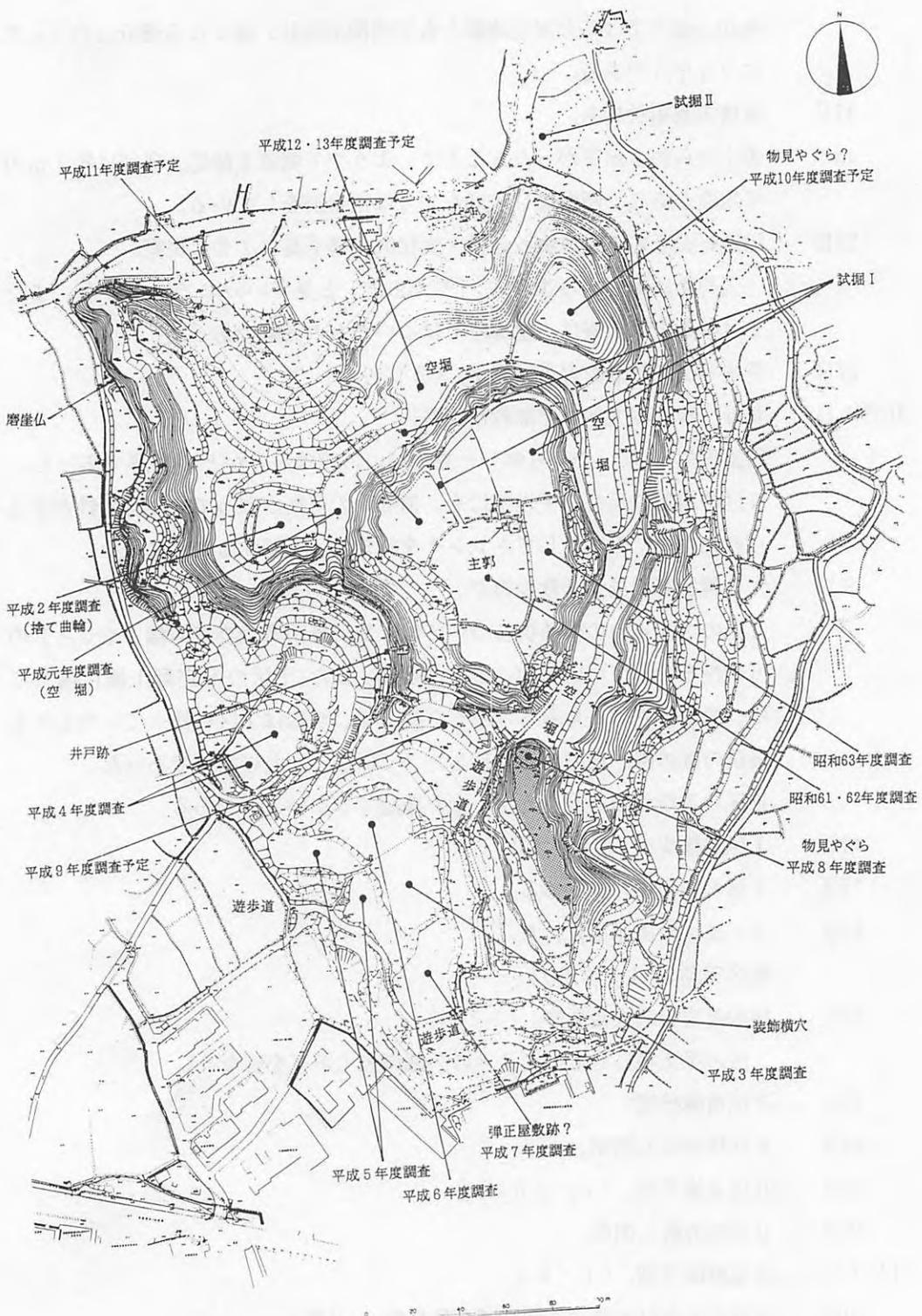
(熊本大学文学部長)・中村幸史郎(山鹿市立博物館副館長)・坂本 重義(南関町教育委員会)・五嶋 竜山(鹿山焼竜山窯)

### 第3節 調査経過

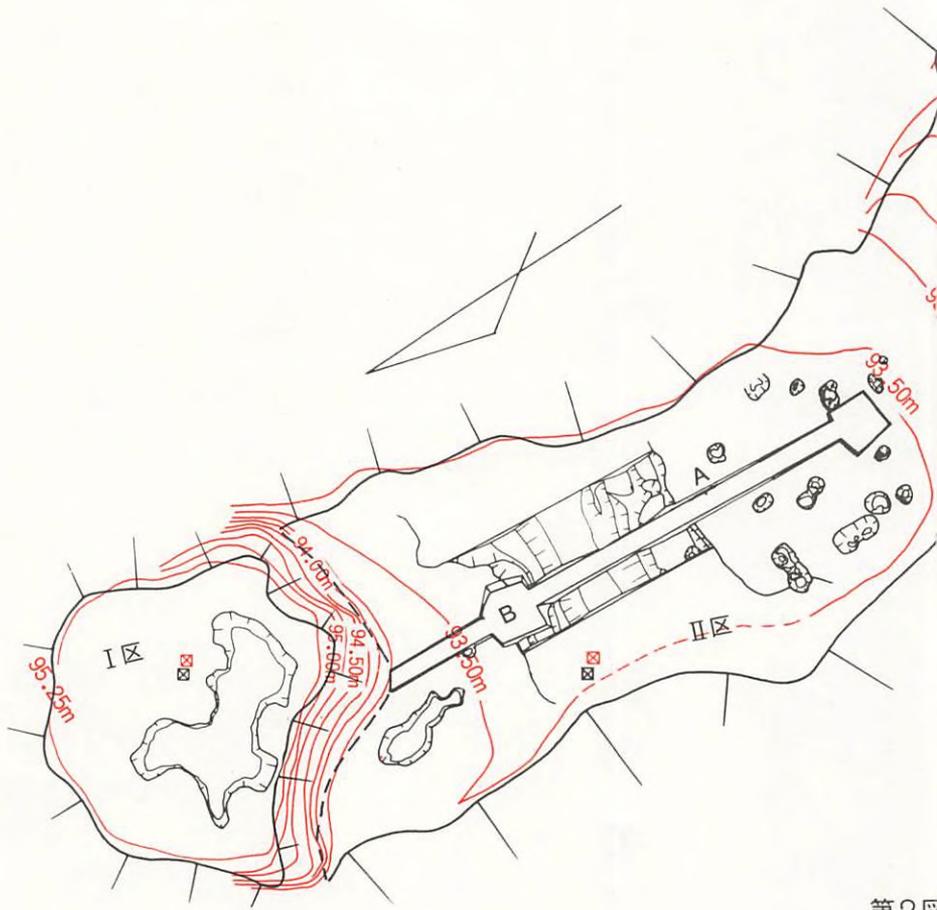
- 5月27日 小川町社会福祉協議会見学。(170名)
- 7月16日 玉名郡学校長見学。
- 29日 発掘調査開始。  
南側監視台と呼ばれている箇所をⅠ区、ここと約2mの段差で続く平場をⅡ区として調査を始めた。但し、Ⅰ区は、面積が狭く排土場が確保できなかったためⅡ区の一部を排土場とした。
- 8月5日 表土剥ぎを終え、遺構確認に移る。
- 7日 南側から、凝灰岩が土状化してサクサクした埋土をもつ遺構が確認されつつある。形は不定形で、平成2年度に調査した西捨て曲輪で確認された遺構と同様のものではないかと思われる。
- 9日 遺構確認写真を撮り、発掘にかかる。
- 14日 台風12号が熊本に上陸。遊歩道の法面が一部崩落。
- 22日 不定形土塋の発掘を続けているが、底部になかなか達せず、土層の変化も見られないため、断面確認のベルトをはずす。遺物は表土剥ぎの際に出土した1点以外、全く出土しない。
- 27日 郷土史講座受講生見学。(11名)  
Ⅰ区の調査を終えたが、不定形土塋以外は全く確認できず、この高台の性格については全くつかめなかった。  
Ⅱ区の表土剥ぎを始める。
- 9月2日 Ⅱ区の遺構確認を始める。
- 6日 表土を約20cm剥くと岩盤の凝灰岩が現れたが、Ⅰ区の下方では約4m離れたところから、幅約6mは凝灰岩が確認できず掘跡の可能性はある。
- 10日 遺構確認を終えたが、凝灰岩が確認できなかった部分は、予想どおり掘跡と思われた。この遺構の外側(南側)から、凝灰岩に掘り込んだ柱穴がわずかだが確認された。この柱穴のつながりを検討すると、一辺約4mの方形に並ぶように思われ、これが絵図に描かれている「やぐら」と思われるものに当たるかどうか、今後の課題となりそうである。
- 11日 遺構の発掘を始める。  
掘跡は、中央部に幅1mのトレンチを入れて形状を確認することにした。

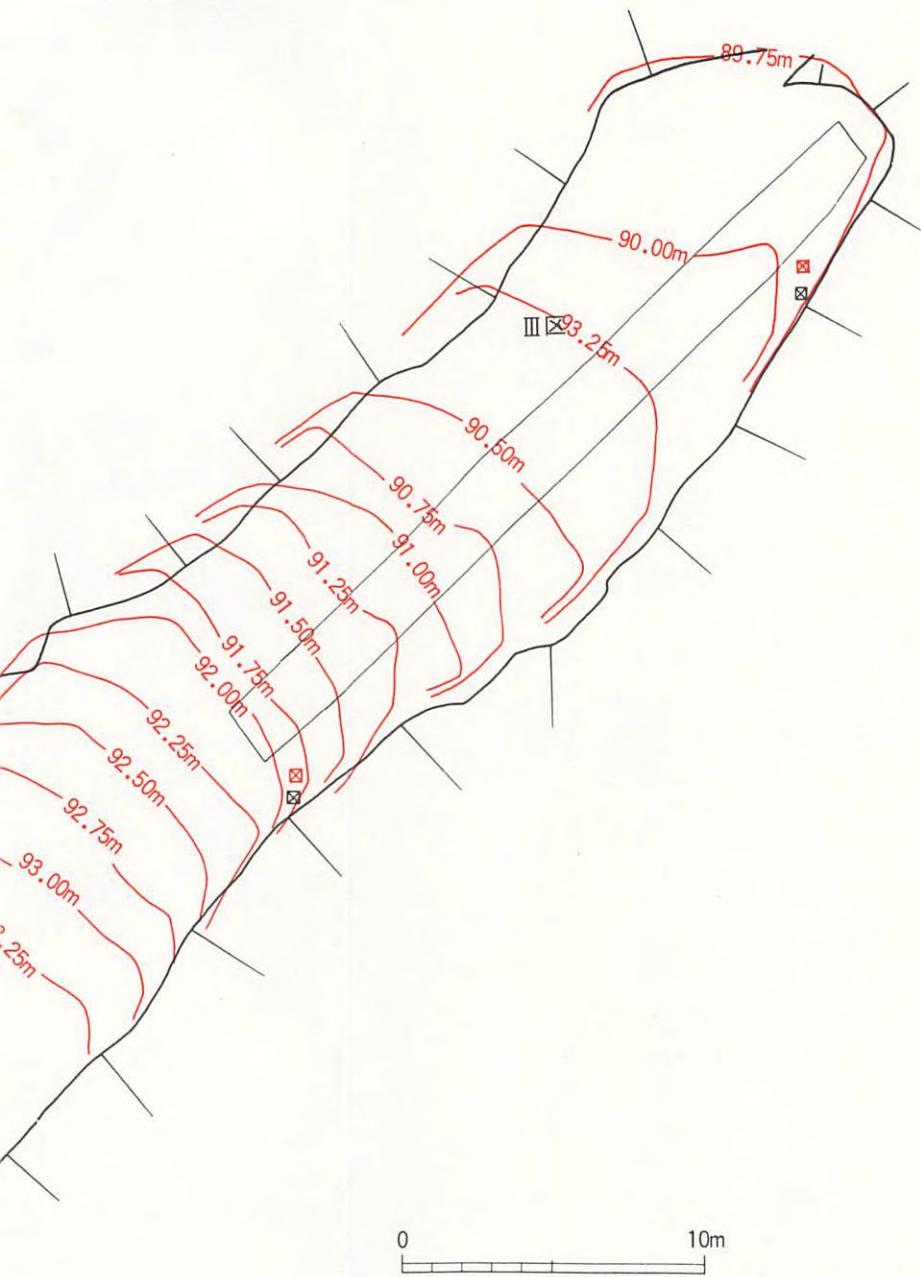
約20cm掘り下げると南北両側とも平坦面が現れ、深くなる部分は約3m程になりそうである。

- 17日 遺構実測用杭打ち。
- 18日 表土から約2m下がったところで、ようやく堀底を確認。底部は約1mの平坦面があり、断面はU字形もしくは逆台形をしている。
- 24日 田邊哲夫玉名市立博物館館長・文化財保護委員（2名）視察。  
一辺約4mの柱穴の並びは、「やぐら跡」と見ていいのではないか、またI区の不定形土塋は、塹壕跡ではないかとの見解であった。
- 27日 荒尾・玉名社会教育委員見学。（20名）
- 10月1日 北野 隆熊本大学工学部教授視察。  
田邊先生同様、「やぐら跡」と見ていいのではないかとの見解であった。  
II区の南側に延びる平坦部にも、何等かの遺構が残っている可能性が考えられたため、III区としてトレンチを設定し、確認することにした。
- 9日 大三輪龍彦鶴見大学教授視察。  
II区の一辺4mの構築物については、他の専門調査委員同様「やぐら」の可能性を考えていいとのことであった。また、I区の不定形土塋に関しては、塹壕よりはこちらも「やぐら跡」で、当初はI区に建っていたものを最後の戦の際、堀の外側に移したのではないかとの指摘であった。  
III区の遺構確認を行なうが、全く確認できないようである。
- 11日 I区遺構実測。（1/20）
- 14日 I区の埋め戻しを始める。
- 16日 II・III区の実測用杭打ち。  
III区実測。（1/20）
- 21日 植木町吉松老人会見学。（71名）  
I区の排土場にしていたII区の一部の表土剥ぎを行なう。
- 23日 II区遺構確認。
- 24日 III区埋め戻し開始。
- 26日 II区遺構実測。（1/20）
- 30日 II区埋め戻し開始。
- 11月7日 堀切断面実測。（1/20）
- 10日 佐賀県玄海町文化財保護審議委員視察。（9名）
- 14日 地形測量。（1/100）
- 29日 大分県佐伯史談会見学。（26名）



第1図 全 体 図





遺構配置図

## 第Ⅱ章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

地元で「物見やぐら跡」と呼ばれている部分をⅠ区、約2m下方に続く平坦面をⅡ区として調査を行なうことにした。Ⅰ区は、空堀の外側に残る高台のうちの一つであるが、他の二ヶ所と比べて面積が非常に狭く、半分掘って、残りを排土場にするという従来の方法がとれず、止むなくⅡ区の一部を排土場とすることにした。

まずⅠ区から調査を始めたが、表土を剥くと南側の広範囲において土色の変化が確認された。凝灰岩が土状化したものを埋土とする土壌のように思われたが、輪郭がはっきりせず、何度も精査を繰り返した。その結果、長方形の土壌に数箇所突起を付けたような不定形の土壌を確認した。深さは約1mあるが、埋土は全く変化が見られず一気に埋められたように思われた。Ⅰ区からは、他に柱穴などの遺構は確認できず、遺物も表土剥ぎの際にわずか1点出土しただけであった。

次にⅡ区の表土剥ぎを始めたが、Ⅰ区の排土場とした約5mについては、Ⅰ区の実測が終わって埋め戻した後に調査を行なうことにした。表土を20～30cm剥くと岩盤の凝灰岩が現れたが、Ⅰ区の下方、約4mの部分から幅約6mにわたっては凝灰岩が確認できず、堀切の可能性が考えられた。尾根線に造られているため、全体を掘り上げることが出来ず、中央部に断面確認部分を残して西側に幅1m、東側に幅2mのトレンチを入れて、堀の状態を確認することにした。約20cm掘り下げると、南北両方向とも凝灰岩が確認され、北側で約75cm、南側で約1.60m平坦面が続き、そこから急激に深くなり本格的な堀になっている。この部分で、上幅3.78m、下幅1m、深さは表土から1.92mであった。次いで、堀切の外（南）側で遺構の確認を行ない、10数個の柱穴を確認した。その後、これらの並び具合を検討して、一辺約4mのほぼ方形になる構築物の可能性を想定し、これが『迎春・和仁仕寄陣取図』に描かれている「やぐら」と思われるものと一致するかどうかを専門調査委員の方々に検討していただいた。

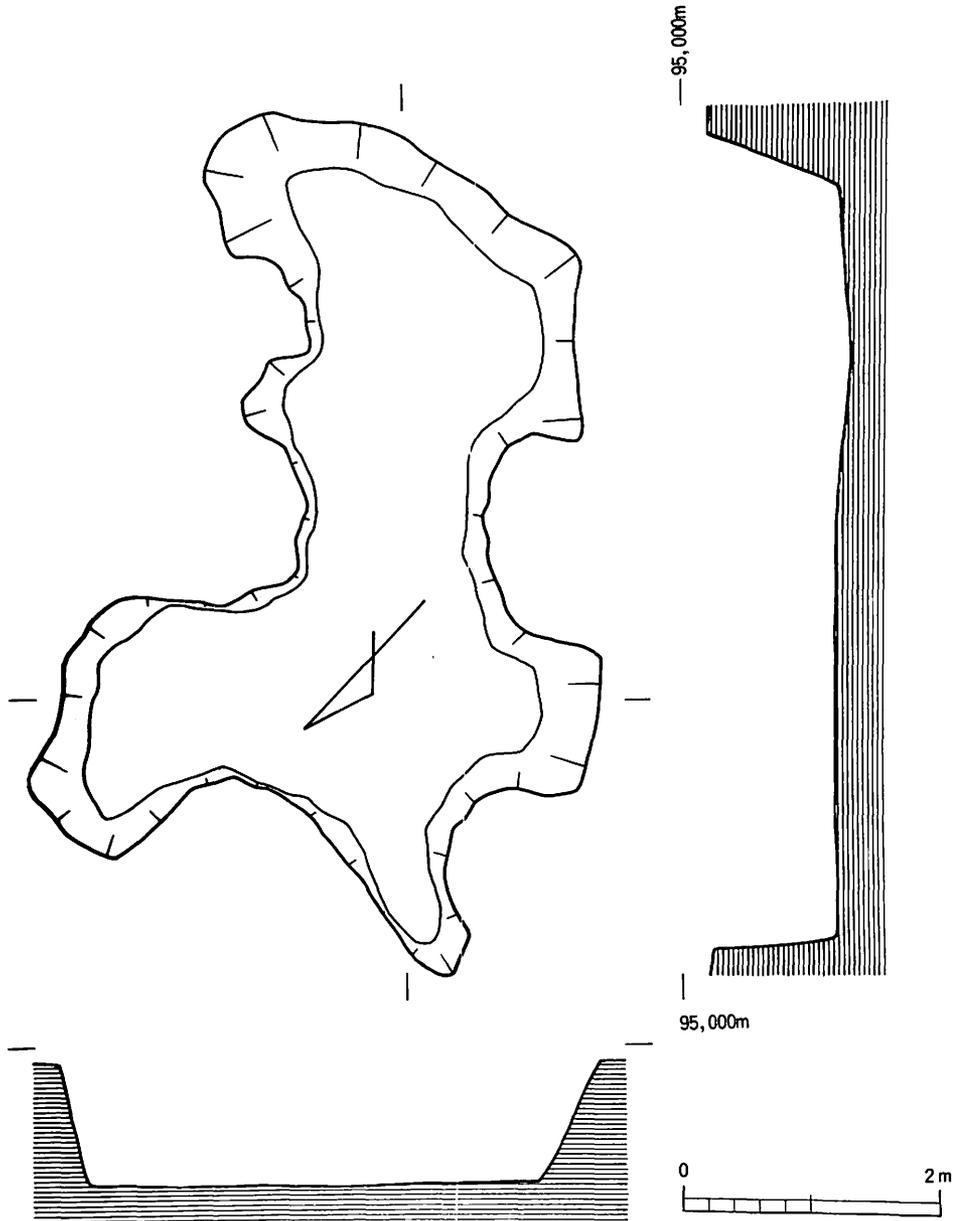
本来なら、ここでⅠ区の排土場としていた部分の調査にかかる予定であったが、堀切が新たに見つかったため、この尾根筋に、さらに何等かの遺構が隠れている可能性を考慮して、Ⅲ区を設定し遺構の確認を行なった。しかし、設定した幅2mのトレンチからは、遺構は全く確認できなかった。

最後に、Ⅰ区の排土場としていた部分の調査を行なったが、不定形土壌が1基確認できただけで、遺物も出土しなかった。

## 第2節 遺構と遺物

### ・ I 区

主郭部を取り巻くように作られている空堀の外側に残る高台で、空堀とは6mの比高差があり、ダラダラと南側に続いている。この丘陵の北端に、以前から地元で「物見やぐら跡」と呼ばれている、約2mのこんもりとした高台(約70m<sup>2</sup>)があり、この部分をI区と



第3図 I区不定形土壌実測図

した。

### (1) 遺構

表土下約25cmで不定形土壌が1基確認されただけで、柱穴など他の遺構は全く確認できなかった。

#### ① 不定形土壌（第3図）

表土を剥ぐと南側の方で、土色の異なる部分が確認された。さらに精査してみると、黒っぽい部分が広がり不定形の土壌と思われた。確認された遺構は、約5.0×1.2mの長方形の土壌に6箇所の突起を作り出したように見える。深さは、約1mあるが底部はほぼ平坦で、立ち上がりは急である。埋土は、凝灰岩が土状化したもので、ほとんど変化がなく、一気に埋められたように思われる。

### (2) 遺物

磁器がわずか1点のみ出土。

## ・ II 区

I区の南側にダラダラと続く丘陵のうち、ほぼ平坦（標高93.5m）な約20mをII区とした。

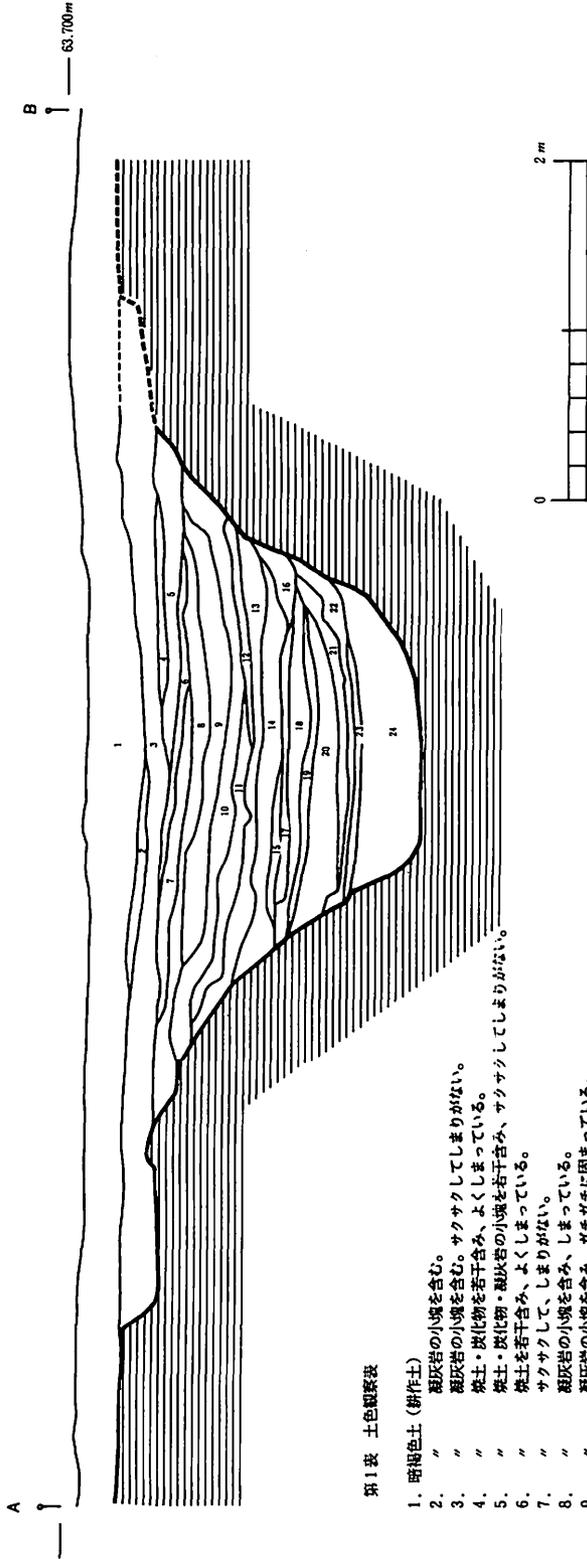
### (3) 遺構

I区の裾部から約4m離れたところで幅約6mの堀切が確認され、さらに、この堀切の外（南）側から柱穴が確認された。この柱穴の並びを検討することでやぐら跡と思われる構築物を想定した。

#### ① 堀切（第4図）

表土を剥いだ時点で、幅約6mの堀切が確認された。東西方向に尾根を切るように作られた堀で、東西両方向とも急峻な斜面になっているため、中央部に土層確認面を残して両側に幅1mの試掘溝を入れるだけの調査しか行なえなかった。しかし、掘り下げていくと表土から約25cmで南北とも凝灰岩が確認され、北側で0.75m、南側で1.60mにわたって平坦面が続いたのち急激に落ち込んでいる。この部分の上幅は3.78m、下幅1.00mで、深さは表土から1.92mである。

土層断面を観察してみると、ほぼ中央部で大まかに上下二層に分割されそうである。1～12層が上層に当り、暗褐色土で、焼土・炭化物の有無などで細かく分けられる。下層は13～24層で、暗褐色土と凝灰岩が土状化した灰色土が交互に堆積している。いずれも、堆積状態は、ほぼ水平であるところから一気に埋め戻されたように思われる。



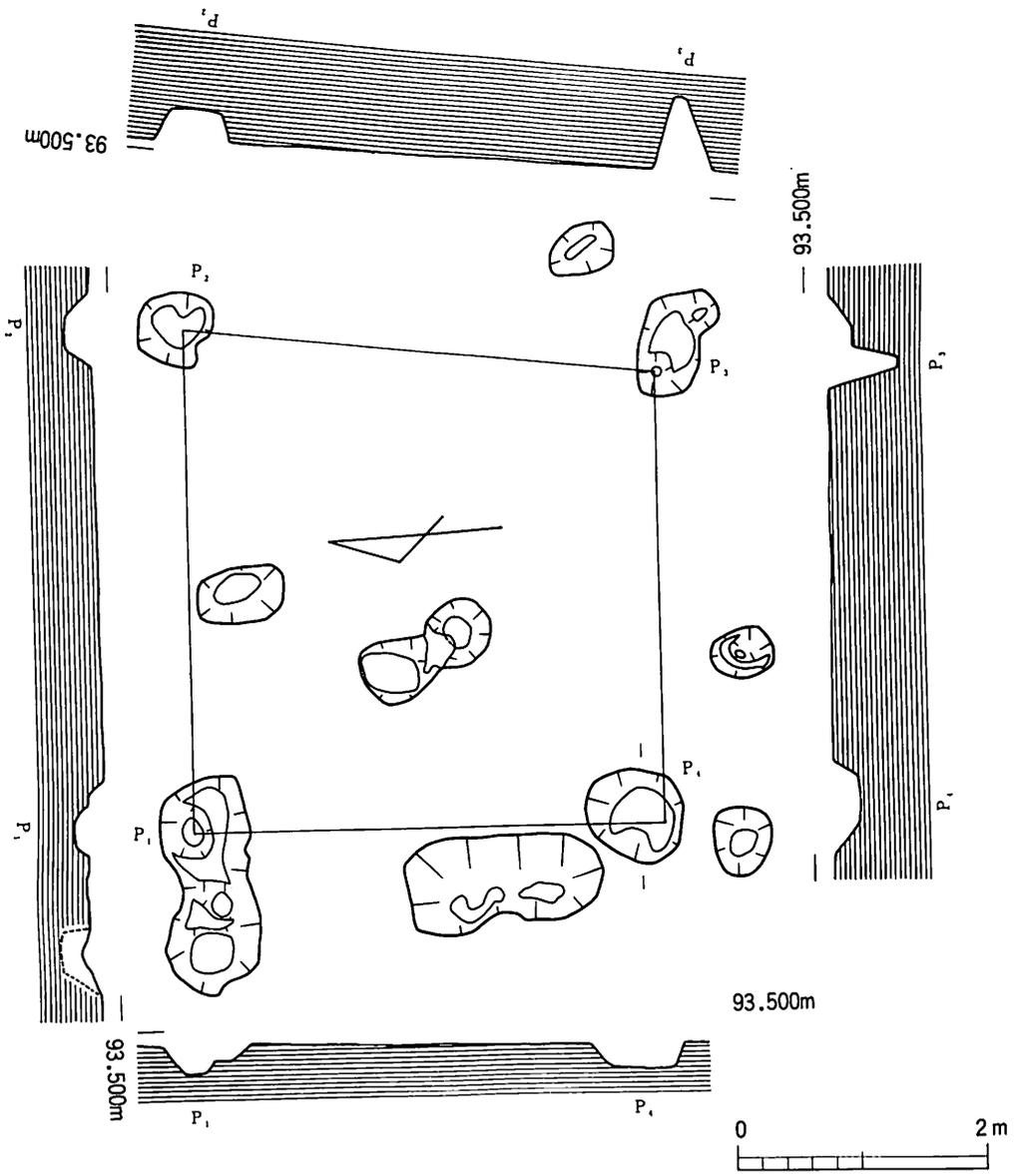
第1段 土色観察表

1. 暗褐色土 (耕作土)
2. " 凝灰岩の小塊を含む。
3. " 凝灰岩の小塊を含まない。サクサクしてしまっている。
4. " 焼土・炭化物を若干含む、よくしまっている。
5. " 焼土・炭化物・凝灰岩の小塊を若干含む、サクサクしてしまっている。
6. " 焼土を若干含む、よくしまっている。
7. " サクサクして、しまりがいい。
8. " 凝灰岩の小塊を含む、しまっている。
9. " 凝灰岩の小塊を含む、ガチガチに固まっている。
10. " 凝灰褐色粘土質の小塊を含む、よくしまっている。
11. 暗褐色土 + 暗褐色土 焼土を若干含む、よくしまっている。
12. " " ガチガチに固まっている。
13. 灰褐色土 凝灰岩が土状化したもので、サクサクしている。凝灰岩の小塊を含む。
14. 暗褐色粘質土 焼土を若干含む、よくしまっている。
15. 灰褐色土 凝灰岩が土状化したものでサクサクしている。
16. 黄褐色土 小塊を含む、ガチガチに固まっている。
17. 暗褐色土 よくしまっている。
18. 暗褐色土 + 灰褐色土 ガチガチした土とサクサクした土が覆っている。
19. 暗褐色土 凝灰岩の小塊を含む。ややしまっている。
20. 灰褐色土 凝灰岩が土状化したものでサクサクしてしまっている。凝灰岩の小塊を含む。
21. 黄褐色粘質土 粘質が強く、固くしまっている。
22. 灰褐色土 凝灰岩が土状化したものでサクサクしてしまっている。凝灰岩の小塊を含む。
23. 暗褐色土 凝灰岩の小塊を含む、固くしまっている。
24. 灰褐色土 凝灰岩が土状化したものでサクサクしてしまっている。凝灰岩の中や大きめの塊を含む。

第4図 II区堀切土層断面図

② やぐら跡 (第5図)

尾根筋に沿って作られている。柱穴の大きさは、長径が51~75cm、短径が60~81cm、深さは21.8~57.7cmで、平均すると74.75×63.75cm、深さ32.35cmである。柱間寸法は、 $P_1 \sim P_2 = 4.00\text{m}$ 、 $P_2 \sim P_3 = 3.80\text{m}$ 、 $P_3 \sim P_4 = 3.60\text{m}$ 、 $P_4 \sim P_1 = 3.80\text{m}$ で $P_2 \sim P_3$ 以外は、直交している。



第5図 II区 やぐら跡実測図

## (2) 遺物

遺物は数点出土したが、図化できるようなものは出土しなかった。

### ・Ⅲ区

Ⅱ区の排土場にしていた部分の外（南）側、約35mをⅢ区とし、遺構の有無を確認するため幅約2mの試掘溝を入れてみた。標高89.75～93.00mとやや傾斜している部分に当るため、表土下24.2～57.4cmで地山での凝灰岩が現われたが、この試掘溝内では、遺構は全く確認できなかった。

### 第Ⅲ章 ま と め

昨年で10年間の調査が終わり、当初の計画でいけばよいよ折り返しにかかったことになる。

今年度は、空堀の外側に残る三ヶ所の高台のうち南側の高台とそれに連なる丘陵部分が『迎春・和仁仕寄陣取図』に「仕寄」と書かれ、その左側に「やぐら」と思われるものが描かれている部分に当たると思われるため、これらの遺構を確認し、この陣取図の信憑性をより高めることを目的とした。

まず、地元で「物見やぐら跡」との言い伝えが残る南側の高台（Ⅰ区）から調査を始めたが、この部分からは、深さ約1mの不定形土塋が1基確認されただけで、柱穴などその他の遺構は全く確認できなかった。次いで調査を行なったⅡ区からは、堀切と柱間寸法が3.60～4.00mである1間四方の構築物が確認された。そこで、この先に延びる部分からも何等かの遺構が確認できるのではないかと判断し、Ⅲ区を設定して試掘溝を入れてみたが遺構は全く確認できなかった。

確認されたⅠ区の不定形土塋の性格については全く見当がつかず、専門調査委員の意見では当初塹壕跡ではないかとのことであった。また、堀切の外側で確認された柱穴の並び具合から想定した1間四方の構築物については、確認された場所を考慮すれば、『迎春・和仁仕寄陣取図』に描かれている「やぐら」と思われるものと考えていいのではなかろうかとのことであった。最後に現地指導をお願いした大三輪龍彦先生は、Ⅰ区の不定形土塋も「やぐら跡」の可能性を指摘された。まず土塋を掘り、その中に柱を立ててやぐらを組立て、半地下式の半恒久的な物見やぐらとして使っていたものを、豊臣軍との戦いに備え堀切の外側の簡単なものに作り替えたのではないかとの考えであった。

いずれにしても、今回確認された「やぐら跡」と思われる構築物の柱穴は、平均63.75×74.75cmと従来のもものと比較しても2倍強の大きさであり、かなり大きな構築物が想定できる。深さが表土から50cm強と、大きさの割にはやや浅いとも思われるが、臨時的な構築物と考えればいいのかもしれない。

また、新たに確認された堀切は、南側に延びる丘陵が城の裾部まで続いているため、これを断ち切ることを目的にしていることは確かであろう。そのことは、外幅約6m、内幅3.78m、深さ1.92mという規模からも推定されよう。しかし、この堀切により、Ⅰ区とした高台が、主郭部を取り巻く空堀との間で完全に独立してしまうことは何を意味しているのだろうか。

今回の調査で「やぐら跡」と思われるものが確認されたことにより、『迎春・和仁仕寄陣取図』の信憑性を高めるといふ当初の目的は達せられたのではなかろうか。

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	たなかじょうあと							
書名	田中城跡ⅩⅡ							
副書名	南側監視台の調査概要							
巻次								
シリーズ名	三加和町文化財調査報告							
シリーズ番号	第12集							
編著者名	黒田裕司							
編集機関	三加和町教育委員会							
所在地	〒861-09 熊本県玉名郡三加和町大字板楠76 TEL 0968-34-3111 内線55							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃 〃	東経 〃 〃	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たなかじょうあと 田中城跡	くまもとけんたまなくん 熊本県玉名郡  みかわまちおおあざ 三加和町大字  わにあざふるしろ 和仁字古城	43366		33度 4分 31秒	130度 35分 53秒	19960729 ～ 19970331	500	整備に伴う範囲および遺構の事前確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
田中城跡	城館	戦国時代 末期	堀跡・やぐら跡			【迎春・和仁仕寄陣取図】にやぐらと思われる構築物が描かれており、今回の調査で、このやぐら跡の可能性が考えられる遺構が確認された。		

写 真 图 版





(1) I区調査前状況（北より）



(2) I区遺構検出状況（北より）



(3) I区遺構発掘状況（東より）



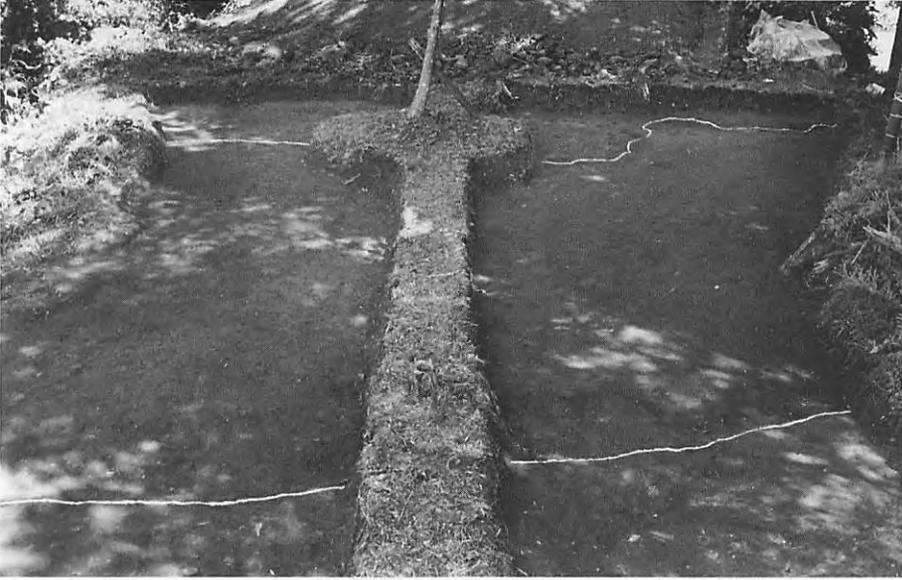
(1) II区調査前状況（北より）



(2) II区遺構検出状況（北より）



(3) II区遺構発掘状況（北より）



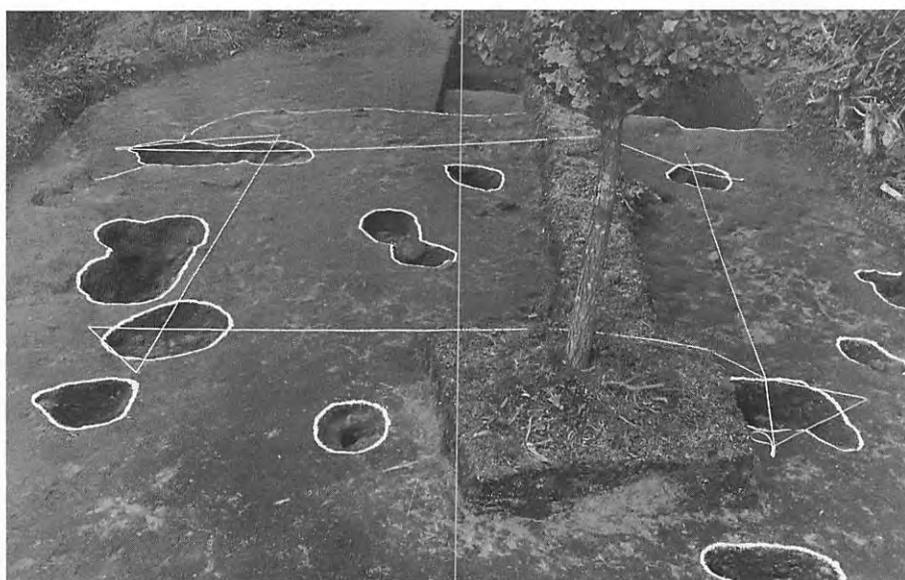
(1) II区堀切検出状況(南より)



(2) II区堀切断面(東より)



(1) II区柱穴検出状況(南より)



(2) やぐら跡確認状況(南より)



(1) Ⅲ区調査前状況（北より）



(2) Ⅲ区試掘状況（北より）

三加和町文化財調査報告 第12集

田 中 城 跡 XII

1997年3月31日

発 行 三 加 和 町 教 育 委 員 会

〒861-09

熊本県玉名郡三加和町板楠76

印 刷 熊 本 県 印 刷 セ ン タ ー

〒862 熊本市鹿埴瀬町496-1



